

保育と建築を学んだ学生から見た 子ども空間のハードとソフト

神戸芸術工科大学（デザイン学部）環境・建築デザイン学科 堀井慎太郎

第16回

■ 2つの体験

私は2つの大学を卒業しました。1つは幼児教育の短期大学。もうひとつは環境・建築デザイン大学の大学です。この春からは子どものための建築を専門に行う設計事務所勤務に就いています。私が子どもと触れ合うことから、子どもを取り巻く環境に携わるようになった経緯を振り返りながら、子どもたちの豊かな空間についてお話をさせていただきます。

幼児教育を学んでいるときの実習の出来事です。私の通っていた短大では、保育園、幼稚園だけではなく、障がい者施設でも実習を行います。子どもが好きな学校だったので、障がい者について熱心に学んでいた。学生ではありませんでした。しかし、ここで私はとてもシヨッキングな体験をしました。それは、重度の知的障害をもつ利用者の方が居室として利用している部屋を見たときです。薄暗く汚れた灰色の壁と床、へたれたマットレスが横たわり、窓の外には鉄格子。なにも知らずこの部屋だけを見たら、きつと牢屋だと勘違いするはずでした。

そのような環境で、利用者の方は毎日生活し、職員の方も仕事をしていたら、職員の方も仕事をしていかなければならないので、10日間の実習でしたが、精神的にかなり追い込まれたのを今でも忘れられません。

別の実習で児童養護施設に行ったときです。こちらでは、幼児から高校生までの子どもたちが、小さいマンションのような建物に詰め込まれて生活していました。なんとなく男女のエリアが分かれているくらいで、プライベートはほぼゼロに等しいものでした。高校生が利用する部屋は二段ベッド2台、勉強机4台、あとは狭い通路のみで、些細なことでも衝突し、争いあうのが目に浮かぶような部屋でした。職員の方もやんちゃ盛りの子どもの手に負えないくらいかかえ、とてもすべてをカバーしきれないといった様子でした。

利用者・職員からフィードバックして正解に近づく建築
それから、私は建築の分野に進みました。4年間、建築やデザインを学びましたが、最初に紹介した障がい者施設の正解のかたちはいまだに分かりません。

むしろ余計に分からなくなった気がします。利用者の方にとっては極限まで外部からの刺激を減らしたあの空間が一番居心地よく、正解ではないかとも思えてきました。

しかし、やはりあそこで感じた違和感を拭い去ることはできませんし、働く職員の方々のことを考えてもやはり辛いものがあります。

理由の一つだけはっきりしています。建築だけで解決しようと考えていたことです。建築は人に使われてこそ、その価値を発揮します。あの障がい者施設を設計しようと思ったら、自分の頭の中だけでいくら線を描いても納得するものは生まれず、実際に生活する利用者や職員の様子からフィードバックを受けないと、そこに正解は現れないのだと思います。

その空間を利用する人たちと建築・設計者が良い関係でいることが大事だと、4年間学んで今感じていることです。

関係だと感じた建築を紹介したいと思います。
ふじようちえん（手塚貴晴十手塚由比——手塚建築研究所）
こんな園を設計したいと思うと同時に、この幼稚園でならもう一回保育士やってもいいかなと思わせてくれた建築です。不整形な楕円をした平面に、内に傾斜した屋根がかかっています。子どもたちはその上を走り回っています（写真1、2）。

この園が素晴らしいと感じたところは、この建築が、加藤積一園長の幼児教育理念を活かすという、そこからきているという点です。園長と設計者の深いコミュニケーションによって、想いと空間が寄り添い合って建築が生まれています。そして、そこで生活する子どもたちは生き生きと日々を過ごしています。

ハードとソフトのねじれ
事業所内保育施設を例に
さて、自分の体験から学んだハードとソフトの関係を述べました。ここで、これを踏まえて、今私が注目している保育施設の形態について少し触れてみたいと思います。それは、事業所内保育施設（※）です。事業所内

保育施設は社会問題となつて待機児童解消の一手としても注目されています。私が注目している理由は、この事業所内保育施設は、ハードとソフトどちらも一般の保育施設と異なる特性を持っているという点です。ハードは、どちらかというところ一般の保育施設よりも不利な状況が多いと言えます。会社のビルや敷地内に建てられることが多く、園庭がとれないなど敷地条件が苦しい場合もあります。

ソフトの利点のひとつに、小

規模保育があげられます。保育の規模に対する考え方はさまざまかもしれませんが、保育士一人あたりに対する子どもの人数が少ないほど細かい対応をしながらあげられるのは、想像に難くないと思います。ちなみに、現在の基準では、0歳を見守る保育士は三つ子、1、2歳になれば六つ子の赤ちゃんを育てているという構図になります。こう聞くとなかなか厳しそうに感じます。

ハード、ソフト両方にかかることといえば、親子がすぐ近くにいるという特別な環境でしょう。園によっては

徒歩数分で会える距離にいます。親子にとってこれほど良い環境はないと思われれます。しかし、母親の方は安心感を得て働くことができても、登園時にお母さんと離れたくなくて泣く子どもがいるように、子どもにとってもは離れはなれであることには変わりはないのかもしれない。「すくみあえる距離」というのは、親しか感じていないと捉えることもできそうです。

現在、全国各地で展開されてきている事業所内保育施設（写真3）ですが、特異な形態のため設置する会社や現場の保育士にもいろいろなひずみが生じてきていると思います。

卒業研究の中で訪れたある保育園の園長先生は、こんな気になることを言っていました。「保育中に不意に保護者の方が訪問されるのは、保育の妨げになるし、保育士にとってもかなり負担かもしれない。」

もちろん言いたいことは理解できますが、親がすぐそこにいるというハードの利点を、保育士もしくは保育システムというソフトが台無しにしているような、そんな違和感を感じました。逆に、別の保育園では同じフロアの社員食堂を利用する社員が、子どもの姿が見られるような構成にしている保育園もあります。そこでは、母親や保育士だけで

同じ言葉
ハードとソフト両方を大切にすること、空間と理念が寄り添うことで豊かな場が生まれると信じています。そういえば、幼児教育を学ぶ中でも、物的環境と人的環境というワードが出てきました。これも同じことだと思えます。

こうやって読み解いていけば、表現は違えど、同じキーワードで、教育者も保育士も建築家もずっと繋がっていたのかもしれない。いまもう一度そのことを再認識して、みんな子どものために話しましょう。



写真1 (堀井撮影)



写真2 (堀井撮影)



写真3 社員寮を改修し家庭的な保育を展開する事業所内保育施設 (堀井撮影)

※「事業所内保育施設」…事業主がその従業員のために、事業所の敷地内近接地、従業員の通勤経路、従業員の居住地などに設置する保育施設のことを指す。